一宮西高新聞

発行所
愛知県立一宮西高新聞部
一宮市萩原町串作河田1
電話一宮（68）1191
株式会社 大東社
電話一宮（62）1168

教科書・補助教材・一般書籍・雑誌
文具・事務用品・家具・教材
松清本店
稲沢市高御堂1-2-1
電話 0587-32-0048
FAX 0587-21-7419

一宮七夕まつり

私たち新聞部は、西高OBの方々と一緒に七月二十五日～二十八日に行われた一宮七夕まつりにアンケート係として参加した。アンケート実施日は二十六日（金）、二十八日（日）の二日間、アンケートの内容は「どの年代の方々が、どこから、どのような交通手段を使って、いくら消費したのか」である。今回のまつりの来場者総数はおよそ百万二千人。その来場者の約0・1％にあたる九百五十一人からの回答を得ることができた。

アンケート結果を項目別に見てみよう。

まず初めに年代層。十代が最も多く42・2％、続いて三十代、四十代がそれぞれ15・4％、13・6％であった。若者や子育て世代、家族連れが多い傾向が見られた。

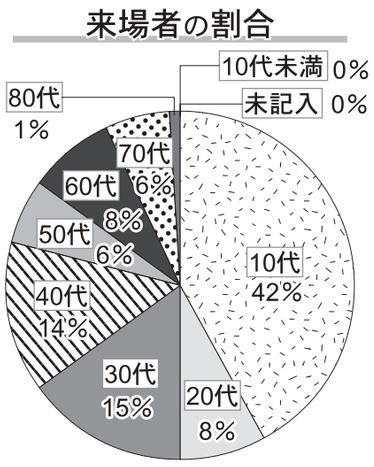
次にどこから来たか。市内からが65・7％、市外からは28・1％、県外からは6・2％であった。交通手段としては、公共交通機関と道路網の利便性から名鉄電車、自家用車を利用する人が多かった。車を無料駐車場にとめてシャトルバスで来る人もあり、交通費がかかっていないと回答する人が多く見られた。

最後に消費について。アンケート回答者の一人あたり平均予算額は二千四百二十七円であった。地域別では、市内からの来場者は二千三百四円、市外からは二千四百十六円、県外からは四千七十三円。このように遠方からの来場者ほどまつりで多くの支出をしていることがわかる。アンケート結果にもあるように地元の人だけでなく、消費額が多い遠方からの来場者が増加すれば、会場である商店街も活気づく。今回、アンケート係としてまつりに参加することで、自分の住む地域の活性化について改めて考えてみたいと思うようになった。

私がアンケートを行う際に心掛けたことは、「誰に対しても躊躇せずに話しかける」ことであった。私は内気な性格のため、見知らぬ人に話しかけることに苦手意識を持っていた。しかし、そんな私の背中を押してくれた西高OBの方々のおかげで、二日目には、一日目よりも二倍以上のアンケート結果を得ることが出来た。みなさんもこのような機会があれば、是非勇気を出して自ら行動して欲しい。今回、一宮七夕まつりのアンケート調査を依頼し、私にこのような経験をさせてくださった西高OBの戸松さんには、心から感謝している。

今回のまつりの中で特に印象に残っているのはコスプレパレードである。私は、一応アニメ好きということもありパレードには、関心があったものの、正直、まつりで行われるコスプレなんて……とも思っていた。しかし、実際のパレードは私の予想をはるかに上回るものだった。猛暑の中、リラックマやキティちゃんの着ぐるみを着ている人、リゼロのレム、ラムやエヴァのアスカ、レイなど、アニメのキャラクターのコスプレをしている人などが参加していた。その中でも細かな刺繍が施された衣装をまとい、キャラクターを忠実に再現している参加者には感心した。さらに、このパレードの良いところは、参加費がかからないところだ。有名なコスプレサミットでは参加費として約六百～千円かかる。だが、今回のように参加費が無料だと、誰でも気軽に参加することができる。すると、何気ないきっかけでコスプレに興味を持ち、コスプレをしてみようと思う人が現れるかもしれない。このようにどんどん人を巻き込むことで、コスプレパレードは盛んになり、更には七夕まつりの来場者数も若者や家族連れを中心に増加するのではないだろうか。

（石原）



論説

「自然災害の被害を少しでも減らすために」

今、日本は今までにない自然災害に襲われている。今までの観測記録を塗り替えるような未曽有の災害が多発している。皆さんも台風の被害は記憶に新しいでしょう。令和元年台風15号は関東地方に上陸した台風としては「観測史上最強クラス」の台風で、関東地方を中心に甚大な被害をもたらした。また令和元年台風19号は沖永良部台風から四十二年ぶりとなる命名台風となる見込みである、まさに未曽有の大災害であった。この台風は、台風としては史上初となるが特定非常災害として政府が認定した。この台風の被害は、各地での大規模浸水、そうそう氾濫しないと思われていた一級河川の決壊という、今までにないものであった。また各地で観測史上最大の降水量を記録し、日本の最大降水量すらも塗り替えていくものだった。人的被害も死者が六十八名、行方不明者十二名、重軽傷者四百名以上（＊十月二十日現在）という大きなものだった。

これらの被害は一部でしかなく、台風に限らず様々な災害が毎年のように発生している。しかしそれらは完全に不可避であったのだろうか。甚大な被害をもたらした台風19号だが、気象庁は何日も前から会見を行い、最大級の警戒を呼び掛けていた。またハザードマップを見ても今回の被害と重なるところが多くある。また自治体も、地元の河川やダム、土砂災害の情報を随時発表していた。それらの情報を一つでも多く見ていて、しっかりと緊急時の対応を準備していれば、人的被害の多くは減らせたのではないだろうか。

避難、防災の心理として、実感が湧かず、どこか他人の事のように考えてしまうというものがある。実際自分も、避難経路や防災袋の位置は確認しても、台風情報はあまり見ていなかった。実際に被害にあった方の多くは、「まさか自分たちのところがこんなことになるとは思わなかった。」と話すそうだ。しかし実際に被害にあってからでは済まないこともある。

私たちは高校生で、逃げられるかもしれない。私たちは自分の身も守らなければならないが、親、祖父母、小さな妹、弟たちも守っていかなければならない。そんな時、避難経路も、避難した後の連絡手段も、集合場所も分からないのでは、守っていけない。さらに、被災した多くの方は「次は必ず準備、早めの避難をする。」とも語る。

この教訓を決して無駄に、他人事で済ましてはいけない。一人が避難をすると、他の近所の方なども避難しやすい。勇気ある行動が家族だけでなく、近所の方まで救うかもしれない。確かに、避難をして何事もなかった時、恥ずかしいかもしれない。しかしそれでいるだけでも緊急時の安否確認がとても楽になる。

この地方はありがたいことに、今のところ大きな災害が起きていない。しかし明日は我が身。いつ何時、何が起こるかわからない。命を守るため、行動しておくべきなのだ。

しかし、いつ避難を始めればいいのかわからないかもしれない。気象庁の避難勧告は、高齢者など災害時に一番危険に晒される方に避難をうながす。避難指示は緊急のものであり、すぐにでも避難するというものである。また先日出された、「命を守るための、最善の行動をとってください。」というのは大雨特別警報など数十年に一度規模の極めて危険な、家から出て避難をすることすら危ない可能性のある場合に発信される。事前に避難しておくべきだ。

これらの情報は気象庁のホームページに詳しく載っているので確認してほしい。

このように命を守るための情報はたくさんある。テレビがつかなくなってもスマホ、ラジオがある。気にしないだけでたくさんのきっかけがある。災害の時、テレビを台風情報の番組にしておいたり、スマホに台風情報を出しておくなどするだけでも逃げ遅れることが大きく減る。今すぐに避難袋を用意し、家族と真剣に打ち合わせることは難しい。しかし、少しずつ準備し、情報を見ておき、随時確認することは簡単だ。自分と周りの人を助けると思って、行動していくことが、少しでも人的被害を減らすことにつながるのだ。

（木村）

命が確実に守れるのなら、思い切って行動するべきだ。

準備といってもいきなり避難袋、というのは難しいかもしれない。それなら一度家族と緊急時の集合場所や連絡手段、避難場所ぐらいは簡単に確認できるので行うべきだ。これを決めて命を守るため、行動しておくべきなのだ。

意外と知らない日本の文化 茶道

日本の文化と言えば皆さんは何を思い浮かべるだろうか。和食や着物、歌舞伎などいろいろ思いつくかもしれない。その中でも今回は茶道を取り上げたい。実際、茶道についてよく知らない人は多いと思う。これを機に茶道についてもっと知って欲しい。

茶道とは

伝統的な様式に従い、客人にお茶を振舞うことである。また、茶道具、書画、華道、着物などの多くの芸術に触れる事ができるため「総合芸術」とも言われている。茶道には多くの流派が存在する。その中で表千家、裏千家、武者小路千家はまとめて「三千家」と呼ばれている。お茶の歴史は平安時代からと言われているが、その頃は、お茶は薬として入ったため広まらず、嗜好品としては鎌倉時代に栄西によって伝えられた。今の茶道は千利休が完成させた「わび茶」が元となっている。女性が行う印象が強いかもしれないが、昔は武士が戦う前などに行われていた。女性が茶道をするようになったのは、明治時代頃で、女子教育の一環として用いられたからだ。

流派の歴史

多くの流派の中で「三千家」について調べてみた。そもそも「三千家」は千利休のひ孫にあたる人物達が立ち上げたものだ。次男は「武者小路千家」を、三男は「表千家」、四男は「裏千家」をそれぞれ立ち上げた。三男は江岑宗左（こうしんそうさ）という人物で、正式な後取りであり、千家の屋敷と「不審庵」という茶室で始まったのが表千家になる。有名な裏千家との違いはお点前の仕方の他、女性の袱紗の色が裏千家は赤色であるのに対し、表千家は朱色であることだ。

男性と女性での違い

男性のお点前を「男点前」と言い、女性のお点前を「女点前」と言う。男性の方が凛々しく単純な印象がある。道具の大きさは女性と比べると全体的に大きい。そして、女性の袱紗は朱色や赤色であり、男性では青紫色の袱紗が使われる。

季節による違い

季節によって作法や道具は変化する。特にお茶碗は夏に涼しげなガラスのものを使ったり、冬は筒茶碗という底の深く冷めにくいものを使ったりしている。

マナー

茶道では礼儀作法が非常に大切で、やってはいけないことも多くある。その中でも有名なのは、「畳の縁を踏んではいけない」ということ。それではなぜ、いけないのか。理由は大きくまとめて三つある。一つは格式を守るためである。畳には「畳縁」と呼ばれるものがついている。そこには、家紋が入っているものもあるため、その家の格式を踏みにじるような行為となってしまうからである。二つ目は身を守るためである。茶道は元々、武士の間で行われていた。畳の間から刀などで刺されてしまう危険を回避するため、踏んではいけなかった。三つ目は畳を傷めないためである。昔の畳は今ほど丈夫ではなかったので、大切に扱わなければならなかったとされている。

では、お点前を行う時はどんなことを心掛けているのか。実際に茶華道部の皆さんに聞いてみた。

お点前を行う時、心掛けていることは？

「上手な人のお点前を見て覚え、自分が同じようにお客様にお点前できるようにしています。また、茶道の所作は基本的に、流れるように行うので、一番最初の挨拶以外はいつも手を動かし、また、その際には手が美しく見えるよう、指先を閉じることを心掛けています。やはり集中力が必要です。そして、おもてなしの心が大切です。」

茶道が発展していくために伝えていきたいことは？

「茶道の立ち居振る舞いの美しさや日本の伝統文化の奥深さです。」

茶道を習ってみて良かったことは？

「日本の文化に触れることができ、礼儀作法を学ぶことができて良かったと思っています。和菓子で季節を感じ、楽しむこともできます。」

どうだったであろうか。皆さんが少しでも茶道を知るきっかけになれば幸いである。ただ、お茶を点てるだけでなく、多くの細かな心配りが茶道では見て取れる。これからは、ただお茶を頂くだけでなく作法や茶碗などを見て頂きたい。そこには、昔から受け継がれてきた小さな「おもてなしの心」が多く隠されているに違いない。そして、最後に、取材にご協力頂いた茶華道部の皆さんに感謝を申し上げたい。

（大竹）

後期生徒会

①部活
②座右の銘
③今行きたいところ
④一言

《会　長》
大角さくら
①文化部
②転んでもただでは起きない
③富士急ハイランド。ジェットコースター全制覇したい！
④「またお前か！」と思われるでしょうが、『またお前でよかった。』と言わせます。よろしくお願いします。

《副会長》
前川　侑輝
①弓道部☆
②救われぬ者に救いの手を
③自分が最も幸せだと思った夢の中の世界
④楽しみましょう！☆

《書　記》
葛谷　海人
①バドミントン
②明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ。
③シンガポール。マリーナベイサンズに泊まりたい！
④就斗先輩に負けないように、一生懸命がんばります！

《会　計》
米谷　駿希
①卓球
②まず動く、そして考える
③過去
④よろしくお願いします。

大角さくら　葛谷　海人　米谷　駿希　前川　侑輝

ESSAY

朝起きて、半開きの目を擦りながら、洗面所に行き、蛇口をひねり、手にお湯を溜め、顔を洗った。

目を開けると、水でびしょびしょに濡れた自分の顔が鏡の中央に映って見えた。鏡の右上の隅には鏡の向かい側に取り付けられた、カレンダーの「30」の数字が、左右反対になり、「08」になって見えた。

中央に視線を戻すと、鏡に映った自分と目が合った。ニコッと微笑んでみると、「彼」もニコッと笑った。顔を鏡に近付けると、彼も顔を鏡に近付け、遠ざけると、また、同じことをした。

「彼」が、私の姿が鏡に映った、ただの像でしかないということは、もちろん分かっているのだが、私には、彼が意志を持って動いている人間のように見える。まじまじと彼を見ていると、何だか不思議な気分になる。

タオルを取り、顔をすっぽりと覆い、水分を拭き取った。ちょうどお湯で濡れた肌に柔らかいタオルが当たって、温かくて気持ち良い。顔の感覚に身を委ねていると、頭がボーっとする。急に目眩がして、ほんの一瞬意識を失った……

額に強い衝撃を受け、我に返った。額が痛い、鏡にぶつけたようだ。額を水で軽く洗った後、洗面所を後にした。リビングへ行き、朝食を食べ、学校に行く準備をした。学校へ行き、授業を受け、その後何事もなく、家に帰った。

家に着き、靴下を脱衣所に放り出した。その後、手を洗いに、洗面所に行き、蛇口をひねって水を出した。手を洗いながら、鏡を見ると、「彼」もまた、手を洗いながら、鏡を見ている……

向こうからは、私はどう映っているのだろう。こっちの世界を左右反転させたように向こう側は見えるから、向こう側からしたらこっちの世界の方が、左右反転の鏡の世界に見えるのだろう。

しかし、こっちの世界からすると、向こう側が鏡の世界である……

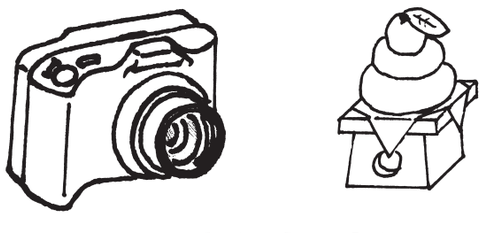
もしかすると、私が向こう側に行ったとしても、私はそれに気づかずに、こっち側を鏡の世界と思い込むのかもしれない。そう考えると、背筋が少し寒くなる。

鏡の左上の隅にはカレンダーの「08」の文字が「30」になって映っていた。

（竹村）

計量器・OA機器
事務・学用品・書籍
紙徳商店
一宮市萩原町萩原
TEL 68－0034
69－4121
FAX 69－2466

Sports Uniform
Bag / Luggage
企画・製造販売
株式会社 水野繊維
http://msmizuno.jp
〒454-0004
名古屋市中川区西日置二丁目15番17号
TEL（052）331－3077
FAX（052）331－3127
E-mail info@msmizuno.jp


～一瞬を永遠に～
稲沢市祖父江町
石田写真館
0587-97-0059

お昼休みに
手作りパンの販売をしています。
ふれあいサロン さんさんガーデン
さん・さん萩原
一宮市萩原町中島字番所48-1番地
☎0586-69-3388

ロックに行こうぜ 6×9 Go For win！ 5 4

九月三日、火曜日。待ちに待った日が始まった。令和最初の、体育祭である。九月に入ったとはいえ、まだまだ夏の日差しのある、とても暑い日だった。スローガンは、「ロック（6×9）に行こうぜGo for（54）win！」

まず、グラウンドに出て目に飛び込んできたのは、堂々と並ぶ九体のマスコット。第Ⅰ群団がんこちゃん（ピンク）、第Ⅱ群団ピチュー（黄）、第Ⅲ群団スパイダーマン（赤）、第Ⅳ群団スティッチ（青）、第Ⅴ群団ティガー（オレンジ）、第Ⅵ群団リンク（緑）、第Ⅶ群団チェシャ猫（紫）、第Ⅷ群団シナモンロール（白）、第Ⅸ群団ダースベイダー（黒）だった。どの群団も、様々な工夫がされていた。このマスコットたちには、群団のテーマはもちろん、この日への期待なども詰まっているような気がした。

開会式、準備運動を終え、いよいよ競技が始まる。最初の競技は男・女6×150メートルリレーである。男・女部対抗リレーのバラエティ部門では、部を象徴するものを身に着けて走る。水泳部は水着で走ったり、演劇部は劇の衣装を着て宣伝をするなどと、観ている人を楽しませた。

体育祭の目玉は、なんと言ってもリーダーの応援合戦である。どの群団のリーダーも、キレと迫力のあるダンスを披露した。ダンスと共に、ドラムの音が身体に響くようだった。後ろに控えたマスコットと、それらをモチーフとした手作りの衣装が、さらに華を添える。観客たちは魅了され、目を離すことのできないパフォーマンスだった。ここで午前の部が終わる。

昼を迎え、気温が上がるとともに、生徒のボルテージも上がっていくのを感じた。

午後の競技は、20人21脚から始まる。かけ声をかけ、息を合わせて走る様子が印象的だった。男・女多人多脚借り物リレー、綱引きと続き、最後の種目の群団別対抗リレー。熱い思いが伝わってくるリレーだった。応援する生徒たちも、席の最前列で並び、「頑張れー！」「行けいけ！」「ファイト！」と、声を上げて応援した。選手、観客が一体となり、白熱したレースであった。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、閉会式がやってくる。笑顔あり、悔しさありの思い出に残る一日だった。どの群団も、優勝を目指してやり遂げた。ロックで暑すぎた、熱すぎた体育祭であった。

（蒲）

文化祭

九月四日(水)から六日(金)の三日間、第五十四回西高祭が開催された。どのクラスも三週間準備してきた成果を発揮し、見に来た人を大いに楽しませた。

一日目、弁論大会が行われた。選考を通過した五人の弁士が、自らの意見や思いを全校生徒の前で発表した。その後クラス企画の準備時間があった。私のゼミクラスでは、会場を設営中、ボードが想像以上に小さかったなどの問題も発生したが、その日のうちになんとか準備を終わらせることができた。

二日目、クラス企画、文化部、有志の発表が始まった。どのクラス企画もとても凝っていて、ポケモンやカジノ、ディズニー、パイレーツ・オブ・カリビアンなどの人気の企画は、長蛇の列があった。クラス企画のポスターも力作ばかりだった。

三日目、多くの企画では、より完成度が高くなっていた。最後まで皆に来てもらえるよう、そして皆を楽しませることができるよう、各クラス一丸となって頑張っていた。

クラス企画の発表が終わった後、片付けが始まった。入念に準備したものの、ほぼ全てを壊さなければいけないのが少し名残惜しかったが、てきぱきと片付けに取り組み、いつもの教室に戻していた。

その後、表彰式が行われた。今回の表彰式は体育祭の表彰も同時に行われたためか、とても盛り上がっていた。昨年度、三年生が全ての部門で優勝していたが、今年は弁論大会とクラス企画の劇部門で一年生が優勝した。

今回の西高祭は自分にとって初めての文化祭だった。皆の行事に対するやる気を感じることができ、とても良い経験をした。自分は今後、学業や部活にいつも通り全力で取り組み、予餞会などの行事に今回の経験を生かそうと思う。そして、来年度の西高祭でもクラス企画などで今回よりも良い結果を残そうと思う。

（尾嵜）

弁論大会

『若さ』

一年四組　池田りりい

「もし人生が一杯のコーヒーだったら。いったい何歳までが熱々で何歳からがぬるいのだろう。」「もし人生が一食のラーメンだったら。いったい何歳までが食べ頃で何歳から麺がのびているのだろう。」「もし人生が一本の映画だったら。いったい何歳までが感動のラストシーンで何歳からエンドロールなのだろう。」「もし人生が」という詩の中の言葉です。

私は今十五歳。今までは十五歳は若いイメージでした。むしろ自分の中ではそれが当然のことであったので自分の若さについて深く考えたことなどなかったのです。しかし、ふと思いました。「なんで？」と。「何を根拠に私は私を若いと思っているのだろう。」と。驚きました。自分が今まで「若さ」について明確な基準を持っていなかった、それに気付いてすらもいなかったことに驚きました。いつまでが人生の中での若い時期なのか。そもそも、「若い」って何だ。唐突に、「若い」という言葉にかかった靄が見えてきたのです。

このことをきっかけに、世間の「若さ」の曖昧さが感じられるようにもなりました。例えば、この言葉。皆さんも一度はどこかで聞いたことがあるのではないでしょうか。「若いうちに何でもやってみなさい。」ここでも出てきました。「若いうちに」。では、この言葉を発した人に質問してみましょう。「若いうちにって、いつのことですか？きっとあなたは相手のことを若いと思っている。だからこそ、その言葉をかけたのでしょうね。わかります。でも、あなたは相手のことをなぜ若いと思うのですか？」と。しかし、こう質問してみたところで、明確な若さの基準は得られないと思います。なぜなら、私達が「若さ」について共通の概念を持っていないからです。もしかしたら、年齢で、基準を決められるのでは？と思う人もいるかもしれません。

そこで、実際にクラスメイト三十七人に若いと思う年齢のアンケート調査を行いました。結果は、二十三人が二十代まで、十人が十代まで、三人が三十代まで、一人が五十代まで、となりました。同じ年齢、同じクラスの私たちでさえ「若さ」の認識に差があるのです。

ところで、私は今まで「若さ」の曖昧さについて語ってきたのですが、これをふまえて何が言いたいのか、といいますと、「若さ」には明確な基準がないからこそ、時としてそれは自分を縛る強力な鎖となってしまうのでは、ということです。

先程のアンケート結果では、60％以上の人が二十代までが若いと答えていました。これには共感する人も多いと思います。しかし、それではだめなんです。なぜなのか。それは、現代の社会の技術の進歩です。医療技術の発達により、私たちが生きていく社会では「人生百年時代」が訪れると言われています。それなのに百年の人生の中でたった二十代まで、半分にも満たない間しか若くないのだと、まだ十代の私たちが思い込んでいるのです。そんな現状、良いわけがありません。

これからの社会を担っていく私たちに必要なのは、「心の若さ」です。明確な若さの基準などないからこそ、私たちの「心の若さ」は可能性に満ち溢れているのです。「心の若さ」によって挑戦の思いが生まれる。挑戦の思いによって行動が生まれる。行動によって成功が生まれる。成功があるから、「心の若さ」が蘇る。私たちがより良い世界を望むのであれば、「心の若さ」を持つことは大きな力となるはず。それなのに、自分で自分に枷をはめてしまってどうするんですか。自分で自分の「若さ」を否定してしまってどうするんですか。そんなことをしていたら、身体が老いるよりも先に心が死んでしまいます。自分を否定しないで。自分にあきらめないで。自分の可能性を、どうか大切にして下さい。

もし、この先、自分の若さ、可能性を否定してしまう時が来たら。思い出して下さい。それは鎖なんかじゃない。あなた自身の力のかたまりなんだと。自分を信じて羽ばたく時、そこには生まれたての新たな世界が広がっているはずです。

MY SCHOOL DAYS

異色な二人

川瀬 信一郎 先生

今年の夏の同窓会総会の折に、卒業して二十年目と四十年目の学年同窓会が行われ、僕の学年がちょうど四十年目に当たったため、五十名を超える同級生が集まった。二十周年目の時には確か八十人ほど来た記憶があるのでそれに比べれば少ないが、それでも例年に比べればはるかに多い数字である。その中の十数名は一年の時のクラスで毎年クラス会を開いているグループである。担任だったY先生はこの時は出席されなかったが、もちろん今もご健在で毎年そのクラス会には参加されている（ちなみに僕も二年前から仲間に入れてもらっている）。他の顔ぶれを見ると、地元に住んでいる者がほとんどだが、中には東京からそのために駆け付けた者もいた。

さて、そんな学年の中で過ごした三年間だったが、いろいろと思い出は尽きず、この文を書くにあたり何を取り上げようか非常に迷った。七年半前に母校勤務となった頃、三十数年ぶりに西高に来て、なんだかタイムマシンで降り立ったような不思議な感覚があった。当時出来たばかりの弓道場や学校北側のテニスコート、二年ほど前に無くなってしまったが第二体育館や二子駅周辺など、変化はいろいろ見て取れた。それでも自分の過ごした教室に入るとその時の情景がまざまざと浮かんでくる。本当に不思議な感覚である。

当時の西高も、難関大学を目指す生徒がほとんどだったと思うが、そんな中、音楽を志した僕は異色というか「変わったやつ」だったと思うし、事実同級生からそう言われた。

そんな中、僕以外にも異色なやつがいた。

原田君と言って、ヴァイオリン製作者になるという進路希望だった。クラスは違ったが、僕も音楽進学希望だったし、ヴァイオリンも弾けたので、話が合った。選択科目が同じだったので、文Ⅱの女子ばかりの授業で三人だけ男子だったうちの二人である。ほとんど先生の話はうわの空で、三人で下らないことばかりしゃべっていた。卒業後、割と間を開けず、その原田君を主役としたNHKのドキュメンタリーの放送があった。当時、ヴァイオリン製作の専門学校など珍しかったし、どういう経緯かはわからなかったが、たまたまテレビをつけたらいきなり彼が画面に出てきたので面食らったのだけは覚えている。

その後、音信不通だったのだが、西高勤務になっていろんなことが脳裏によみがえってきて、その原田君も今どうしているのかと、ググッてみたところ、彼のホームページが出てきて（便利な時代ですね）メールアドレスが書かれていたので、早速連絡をした。

そして彼が紆余曲折があって現在鹿児島県にヴァイオリン工房を構えていることが分かった。それから旧交を温めるのに時間はかからなかった。鹿児島の工房へ行き、彼の製作したヴァイオリンやヴィオラを弾かせてもらったが、いい音なのはもちろんのこと、とても弾きやすかった。いい楽器というのは違うなあと、つくづく感じさせられるとともに、彼の誠実な人柄が楽器に表れているとも思った。彼とはその後もちょくちょく会っている。

さて、結婚してから子育てが一段落するまで、なかなか同級生のことを思い出す暇もないぐらい繁多な生活を送ってきたが、教員として母校に戻ったのをきっかけに、懐かしい顔と再び出会うことができてしみじみとそのことの喜びを味わっている。今から考えると、たった三年間のことだが、しかし、それはその後の人生において本当に重みのある大切なものだと思う。

みなさんもいい三年間となるように過ごしてください。

郷土歴史

私達新聞部は、八月六日に稲沢にあるJR貨物へ取材にいきました。私は始めJR貨物と聞いて、そこがどういう場所なのかまったくわからず、電車博物館のような場所かなと思っていました。しかし、実際は電車があるという共通点を除いてほとんど違っていました。そこで見たのは、貨物列車の修理を行っているところでした。

JR貨物は、全国ネットワークを有する唯一の貨物鉄道会社です。一日に運転する五百本の貨物列車の走行距離は、地球五周分にも及びます。私達が訪問した稲沢にある東海支社では、貨物列車だけでなく、電気機関車やディーゼル機関車なども点検・修理を行っていました。

ここで少し、JR貨物東海支社の歴史を紹介したいと思います。大正十六年一月十六日、今から約八十年前に東海支社は「名古屋機関庫稲沢分庫、名古屋検査所稲沢分所」という名前で発足しました。社会の流れに沿って名前は何度も改称され、現在の名前になったのは昭和六十二年頃のことでした。その間に、初期に中心的に扱っていた蒸気機関車の運用が終了したり、それに代わるディーゼル機関車が開発されたりしました。現在の名前になってからは、業務委託をする会社を変えたりするなどのことがありました。

私達が、JR貨物でまず始めに見せてもらったのは、機関車の点検をするところです。大勢の人達で協力して点検すると思っていたのですが、驚いたことに少人数で点検箇所を分けて作業していました。見学している際、私は作業場がとても暑いことに気づきました。実際に、その日の最高気温は三十五度を超えていました。聞いてみると、その日はまだ涼しい方らしく、日によっては耐えられないほど暑いときもあるそうです。

次に機関車の修理をしているところを見学させてもらいました。そこでは主にエンジンの修理をされていました。修理の仕方としては、一度エンジンの部品をすべてバラバラにして、悪いところの部品だけを変え、またそれを全て組み立てるというものです。一見、何でもないように思えますが、その部品は数えきれないほどたくさんあり、それを組み崩し、そこから悪い部分を見つけ、組み立て直すとなれば、途方もない時間がかかることが分かります。

最後に、過去に使われていた機関車と現在使われている機関車の紹介をしてもらいました。機関車によって見た目が全く違っていて、ディーゼルや電気などの動力によって特徴があることが分かりました。

今まで貨物列車といえば、駅で電車を待っている時にたまに見かけるくらいの存在でしたが、この取材を通して、何人もの方の大変な作業により貨物列車は安全に動き、荷物を私達の元へ迅速に運んでくれていることに気付かされました。

（堀井）

日本貨物鉄道株式会社 東海支社 愛知機関区

作文

そこの紳士淑女、少しお話を聞いてくださいませんか。消しゴム付き鉛筆の金具部分、正式名称はフェルールというそうですよ。次に、食パンの袋を留める〝あれ〟、バッグ・クロージャーというそうですよ。そして、学校の窓についている半回転させて閉める鍵、名前をクレセントというそうです。あなたはいくつ知っていましたか。

「こんなこと知って、何になるんだ。」と思った方もいることでしょう。私も単に正式名称クイズがやりたかったわけではありません。その本意は、「実は知っているようで知らないことってたくさんあるよね。」ということです。

皆さんが生まれてきて十余年、酸いも甘いも経験し、見聞を広めてきたことでしょう。そして、このようにお考えではないでしょうか。「僕、私は世間の大体のことは知っているのではないか。」と。確かに高校生ならば、それなりの知恵や知識はお持ちでしょう。そうして知識の幅を広げていく中で、無駄だと感じてしまうものもあるのかもしれません。しかし、そのような考え方は「慢心」といえるのではないでしょうか。冒頭で紹介した身近な物の正式名称、知らなかったという方は多いはずです。つまり、自分の知らないことというのは周りにたくさんあるのです。それに知識というのは、いつかあなたの身を助け、スキルアップさせるものです。知識を広げていくことは、将来のあなたの選択肢を増やすことにだってつながります。それらを無駄だ、関係ないと切り捨てるのはあまりにもったいないことです。また、「好奇心は猫をも殺す」などという諺を知っていますか。強すぎる好奇心は時として命取りになるという意味ですが、私には逆のように思えます。なぜなら強すぎるその好奇心よりも、好奇心を無くしてしまったときこそが、あなたの成長を止めてしまう、つまりあなたを〝殺す〟ことになってしまうのではないかと考えるのです。

今あなたの知っていることって、この世界全体で見れば、爪垢程度のものかもしれません。あくなき探求心と貪欲な好奇心で知識を蓄え、あなたの見る世界が面白くなることを願っています。最後まで読んでいただきありがとうございました。

（大角）

編集後記

思ったよりも記事を書くのが大変でした。（堀井）

お風呂上りが寒くて冬は辛いですね。（竹村）

書き直しになるとは思っていませんでした。（尾嵜）

布団が僕を離してくれない季節になりました。（木村）

今年からこたつが無い生活です。恋しい。（蒲）

冬は犬を湯たんぽ代わりにします。（大竹）

なんか欲しいものある？と聞かれたので、ビスコと答えたら微妙な空気になりました。なんでや。（大角）

昨年から学ランのサイズ感が全く変わっていないのが微妙にショックです。（宮崎）

マイブームはエジプト文明です。そんなことより、カラヴァッジョ展が最高でした。（山川）

今回初めて記事を書きましたが、どうでしたか。（石原）

『西高新聞』を一緒に作りませんか！特に、1年生を大歓迎。兼部でもOK。